
下僕賞「当選のお知らせ」（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）

紅雨椿葉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「下僕賞」「当選のお知らせ」（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）

【Zコード】

N1609BA

【作者名】

紅雨椿葉

【あらすじ】

一人暮らしでのんびりと生きている男の隣に現れたのは、見たこともない面をしている奴だつた。・・・・・泥棒？（*お題をFortune Fate様よりお借りしています。目次頁にリンクをしています）（*加えてこの作品は、作者頁に書いてある、ブログで連載している小説の転載です。作者本人によるものであります。）

一人暮らしの野郎のポストに、そんな手紙が入っていたのは、忘れもない。

桂樹
陶しい雨の田だつた

世間せじゆで、どこの番組を見ても錦鯉かと見せびらかの鮮やかな着物や「おめでた」「おめでた」や「おめでた」といふ言葉で、非常に祝いの祝い。

血業の俺といえは、何時もと同じように寝転んで、ちょっと奮発したビールとつまみを片手に一杯やって。

年末の大掃除なんてしてなかつたから、一息ついたらそろそろ動こうかなんて思いながら、でも後でと先延ばしにしている、自堕落の代名詞とも呼べる代物だつた。

しかし、幾ら一人暮らしだとはいっても、生活する以上この状況はいただけなかつた。

洗つてゐる皿、なし。
洗濯済みの下着、なし。
湿氣ていないタオル、なし。
力ップ麺、枯渴。

生活できない。流石に。

よくもまあ「こ」までいろいろ溜めたもんだ。
足を踏む場くらいしかスペースがない。

今まで避難していたベッドも、丁度お茶を零してしまったし。

ああそういうえば、洗つてる「ツップがないのもリストに入るな。自分ながらに感心する。

これでお袋がいれば、そんなのんびりしてる場合じゃないでしょと怒られるところだが、一人暮らしを始めた頃から一回も連絡を取つていないので、いい加減愛想を尽かされていると思う。

「いや、でも年末に仕事があつたからいけないんだよな。大掃除なんてやってられなかつたし。一年の疲れを取るために必要な休息だつたんだ」

誰に向けるでもなく、ただひたすら現実逃避のために、ひとり言を呟いた。

ちなみに、この惨状をまだ大丈夫だろうと樂觀できる勇気は俺にはない。

「仕方ねえ、掃除するか。とりあえず・・・・・・洗濯機回すか」

補足しておくと、我が家は一軒家だ。

都会ではなく、とある県の境にある。家賃が安いことと、窒息しそうに近い家が回りにないことを好んで借りてて、ボロいとしか言いようがない、冴えない一戸建てだ。

友人からすれば、庭付きの一戸建てというのは羨ましいのだそうだが、住んでる本人にとっては管理が面倒で仕様がない。

草が生え放題、庭木を荒れ放題にさせておくと、さりげなく家主から注意される。

人の腰くらいにまで草がのびてしまつと、もう廃墟そのもの。ある意味絶景だ。そうそう見れるもんじゃない。

話がそれた。

つまりは、こんな夜間であろうが朝方であろうが、騒音で悩ますんじやないかと心配しなきやならない隣人はいないということだ。

さて、この我が家を綺麗にするためにかかつた時間は丸一日だつ

た。

夜に手をつけて、疲れて放り出して、翌日丸一日をつぶしてようやく人を招待できる家となつた。

招待する奴なんていないけど。

そうだ。

こんなに疲れきつて、そういうえば新聞をとつてないと外に出たときから、すでに災厄は始まつていたといえる。

建てつけが悪いのか古いせいかなんだか知らないが、軋むドアを押して、寒い空氣を被つたといつのに。に。すつ転んだ。

それはもう、芸人真っ青な素晴らしいすべり。

何だつたら見にきて笑いやがれと毒づきたくなるほど、華麗な回転と尻餅を披露した。

観客がいなのが残念だ。

そうだとも、負け惜しみじやない。

この日の端に浮かぶのは、雨のせいだ。

羞恥や痛みのせいじやないとも。

呆然と玄関の前に座り込んでいたのだが、やがて尻が冷たくなつてきた。

氷が張つていた。

なんて素晴らしい年明けだ。

痛む腰をさすりつつ、ポストに向かつた。

編集者から、友人から、去年三回くらいしか行つてないドラッグストアから、ガソリンスタンドから、動物病院からの付録カレンダーなんてのもあつた。

我が家にペットはいない。

それでも組み立てるタイプで、デザインも可愛らしかつたので、後で作ろうと眠つていた工作魂がうずいた。

少し高揚した気分のまま、次の葉書をめくる。

有名なファッショングランドの割引券つきの広告。

・・・・・半纏姿の、時代丸無視の恰好を笑われている気がして、非常に気分が悪い。次。

腹立ち紛れに、階段を音を立てながら登つていると、新聞の隙間から何かが落ちた。

舌打ち混じりにかがむと、白い封筒が枯れ草の上に落ちていた。拾い上げて、眺め回しても宛名だけで、差出人の名前も住所も書かれていない。

「何だあ、こりや？」

疑問を口に出した所で返事が帰つてくるはずがない。

とりあえず早く温い部屋に入つて、それから中を見てやうと身を翻した。

すつ転んだ。

「つたぐ、何だつてこんな田ごと。厄年か、今年は？」

ひやりと襲う言いようのない不快感、微妙な柔らかさが何度味わつても、恨めしい冷湿布を腰に貼ると、思わず短く声を出してしまう。

まったく。

こんな情けない姿、他の奴らには見せられない。

見せるような変態でもないが。

そんなどうでもいいことを考えていると、さつきの封筒を思い出した。

蝶封を模したシールに留められ、さほど厚みはない。

こんな洒落た手紙を送つてくる友人に心当たりはないし、広告でもなさそうだった。

とすると・・・・・・・・・・・・

考へても埒が明かない。

そう思つた俺は、以前誰だつたかに貰つたペーパーナイフを部屋から探し出し、ようやく封を切つた。

薄いベージュ色の紙に、褪せた黒インクで、一行だけ何か書かれている。

下僕賞「当選のお知らせ」

（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）

「はあ？」

「げぼくしょう？」

当選したのは嬉しいが、げぼくしょうってなんだ。

そのまえにげぼくつてなんだっけ。

下？

え、何。

一日だけメイド貸し出しキャンペーん、なんてやつてるのか？そもそも近くにメイドカフェなんてあつたつけ。

でも、それならもう少し早くこれを見たかった。

ぴかぴかに磨き上げた家を見て、蟠封されていた封筒が恨めしくなつた。

いや、しかしメイドとはいえ汚い家に上げるのはどうだらう。人間性を疑われそうだ。

と、そこまで考えたとき。

人の気配を感じた気がして、振り向くと、人形が座つていた。いや、人形ではなかつた。

生気に満ちた曇りのない、深いエメラルドの瞳。

薔薇色の頬。

メイプルシロップのよつな、茶色がかつた金の髪。
勝氣そうな凜々しい眉。

すつとした鼻、引き結ばれたふくらした唇。

纖細な指。スラリとした肢体。

細部にいたるまで、何もかもが美しかつた。

どんな者からの鑑賞、贊美にも堪えうる芸術品。

こんな陳腐な台詞でどれほど伝わるかは疑問だが。

いや、断つておくが俺は変態じゃない！

変態ではないが・・・・・それでも、思わず息を呑み、呆けて
しまうほどの美人がそこにいた。

ぼうつとしていると、人形が眉を片方だけ上げながら問うた。

「お前がぼくの僕か？」

「・・・・・・・・・男かよー。 じゃなくてつ

僕つて、こっちか！」

大きな丸い目は髪の毛と同じ、少し茶が入った金でくつきりと縁取られ、俺を見据える目は湖底のように澄んでいる。

眺めている分には申し分なし

この歴然とした差、差、差！

と、俺には縁がない人生を想像していると、美少年はいらいらした口調で聞いてきた。

柳眉をひそめて、美少年にはふさわしくない皺が浮かぶ。「聞いているのか？ お前がぼくの僕か、と尋ねている」「はいはいはい、きーてますよ。これに見覚えある？」「何だこれ・・・・何て読むんだ？」

例の便箋を見せると、全く知らない様子で自ら手に取って、いたが
どうやら読めもしないらしい。

とぼけていられるつもりか？

ちよつと腹立たしくなつて、皿の前でゆうくうと読み上げてやる。

「アリバウザ」

「げぼくジョ」

一言読み上げて一息つくたびに、たゞたゞしい口調で俺の真似をして。

「このせんのおしゃべり」
「盗賊のオシラセ」

「なお、ちゅうせんはおつぼのつむにかかわらず」

「ナオチュー線は横暴濃霧ニカ瓦ズ」

「むやくいにおこなわれました」

「むや栗にオコナ一れました」

「わざとやつてない?」

「そう聞くと、わけが分からぬといった顔をされた。
そんな阿呆を見るような目で俺を見るな!」

「フツーに喋れるのに、音読すると誤変換起こすつて、どついう教育環境に・・・・・」

半ばあきれ返つて顔を上げると、目が合つた。エメラルドの瞳。ああ、そうだった。

「日本人じゃないもんな。会話だけは何とかできるのか。君、名前は?」

美少年はちよつと滲るように目を泳がし、遠くを見つめ、しばりするよつやく口を開いた。

消え入るよつな声だった。

「りつか・・・・・・」

「リッカ?」

商品名とか、都市名に使われそうなイメージだった。

「チップ」と同じ発音だなとがどつでもいにじりしてはいたが、頭は猛スピードで考える。

リッカなんて奴は知らない。

見たところ年は・・・・・幾つだよ。俺は日本人でも同姓でも年を測るのは苦手なんだ。

中学生かな。高校生じゃねーだる。いや、でも日本人は童顔だからそう思つだけでもしかすると小学生・・・・・いやいや、何にせよそんなことはどうでもいい。

俺の知り合いにこんな酔狂な真似をする奴はいねーし、知り合い

の子どもは全て把握している。とすると本当に無作為の抽選の結果
というやつか。迷惑極まりないじゃねーか。どこの会社だ！
というかこの抽選の目的は何だ！

心で考えつく限りの罵倒を正体不明の誰かに吐き散らすと、ようやく落ち着いてきて、また他の事を考え始める。

そもそもコイツは何処から入ってきたんだ？

窓が開いていたから、そこからか。寒いんだよこの野郎。窓くらい閉めやがれ。っていうか鍵閉めてなかつた俺つて凄い無用心だな。まあ一人暮らしの野郎の家に入る物好きなんかいやしな・・・。いるじやん、ここにつ。

一人で乗り突込みを続け、また脱線するのを避けるために静かに呼吸を整えた。

待て、落ち着け。

とりあえず重要なのは・・・。

「何で此処に来たんだ？ 誰に言われて此処に来た？」

質問と同時に先ほどまでリッカがいた位置に目をやると、見慣れた家具が映つただけだった。

もしかして夢だったのかと期待半分に探すと、当の本人は「ごそと何か作業をしている。

あれは・・・。

「あ！ 僕が楽しみに取つておいた付録を！」

動物病院からのカレンダーを、嬉々とした様子で組み立てていた。俺の非難の声に気づくと手を止め、きょとんとした顔でこちらを見返す。何が悪いのかという顔。つたく、子どもが何でも許されると思ったら大間違いだ。

しかしここで怒鳴るのも大人気ないとしか言にようがないし。

「あのなあ・・・・・・

結局、俺は脱力したままそれだけ言つのが精一杯だった。

「ここにいるお前が僕だといわれたから、来た。ここに行けど前もつて写真も、地図も見させられた。誰かは・・・・・名前が分からぬ」

急に喋りだした。

それは、さつきの質問に対する答え。

「じゃあそいつの居場所は？」

「覚えてない」

「じゃあ親は？」

「オヤ・・・・・・いない？」

「何で疑問系なんだよ。ああ、もしかして意味が分からぬ？」君を生んで・・・・・うーん、君を、好きだといつてくれた人、とかいぬの？」

俺がさつきまで癪だと思つていた、上から口調はすっかりなりを潜めていた。

自信なさげに、不安げに。

節目がちのエメラルドグリーンは濃くなつて、見た目よりも一層幼くみえる。

「・・・・・・いない

「不味いこと聞いた？ ええと、『めん

非常に気まずい。

そんな暗い過去を持つてゐるとは思えなかつたし。

まさかどつかの王家とか貴族とかの末裔じゃないだらうな。

そこで、妾腹の生まれで物心ついたときから苛められてきたとか。

だから親の顔も知らずに今まで

いやいや、小説の読みすぎだ。

確かに王子様みたいな雰囲気だけど、こんな東の島国の、現実主義者が集う経済大国日本にそんなヤツが都合よくいるもんか。

というかその前に此処に来るわけがない。

我ながら馬鹿な発想だとは思ったが、一気に進んでしまった想像にかちりと当てはまつてしまふのは、やはり物憂げな雰囲気が漂つているからなのだろう。

とはいって、いくら何でも此処に来られてもどうしようもないんだよ。

そりや田の保養にはなるが、他人に居座られちや居心地悪いのは言つまでもない。

冷たいとは思うが、出て行つてもらひしか

非情な判断を下そうとしたとき、リッカがまたカレンダーを手にとるのが見えた。

どうやら気に入つたらしい。

ミシン田の所を切り外すのはどうやら上手くいったようだつたが、またさらに細かく切る所は苦戦して、びりつと裂けてしまった。

ああ、もう・・・・・俺がやってたら綺麗に切れたのに。

それでもなんとか全体を切り終わつた。そのころには用紙はあちこち撒かれだつて、見るも無残なものだ。

そうしてから、差込口のところに紙を入れよつとする。

それがまた上手くいかない。

やつてやつと手を伸ばすが、頑として手を離せばしなかつた。

意地になつてゐるらしい。

先ほどとは違つて、好奇心と期待に胸を膨らませてゐる様子を見れば、無理強いする気も起きやしない。

まあいいか。頼り癖がついたら、将来ろくな大人にならないし。諦めてそのまま見守ることにした。

作りはじめて約二十分程度。

完成。

どうだとばかりに誇らしげに見せたサッカーボールに似た卓上フレンダーは、お世辞にも綺麗ではなかつたけれど、なんだか微笑ましくて、よくやつたと誉めてやる。

俺らしくもない。

情を移したら、その時点でもつ駄目だ。

なんだかペットみたいな言い草だなと苦笑いしつつ、床に座つてリッカと視線を合わせる。

雰囲気が変わったことに気づいたのか、リッカがテーブルにカレンダーを置いた。

「いいよ。こんな寒い日に追い返すわけにもいかねーし。いずれ誰かが引き取りに来るだろ。それまでここにいるか？ メシくらいなら食わしてやるよ」

リッカは当然だという顔をした、よう見えた。了承したらしく、目を閉じたままゆっくり頷く。あわせて柔らかそうな髪の毛がふわりと舞つた。

「リッカー！」

「なんだ」

「何だじゃないだろ！ お前、皿洗いくらいこまともにできないのか！？」

リッカが家にやつてきて、数ヶ月が過ぎた。

例のサッカー・ボール型カレンダーは何回か位置を変え、時には埃をかぶつている面があつたりする。

正月にやつてきたためたい客人は、未だに引き取り手が見つからない。

すでに客人扱いしていなのはエプロン姿のリッカを見ていただければ一目瞭然だが、しかし、俺は決して天涯孤独な少年をこき使つている非情で計算高い親父ではないのだと、そこだけ訂正していく。

リッカはもともと下僕賞当選などとこつづけた通知と共に我が家に来た少年だった。

行き着いた先にいる人物が自分の「僕」だとしか言われずに、ここまでやつてきたという、これまたふざけた話だ。

俺が下僕？ 「冗談じゃねえ。

しかしそんな型破りの出会いをしたのだが、一緒に暮らすうちにお互い慣れてきて今では居候している親戚の子供もくらいのポジションに昇格している。

分かりにくいなら、あれだ。

とにかく慣れてきたつていうことだけ分かつてもらえればそれで

いい。

リツカは見たところ中学高校あたりの顔立ちをしているのだが、学校にいかずともいいいらしく、一日中ぶらぶらしている。

縁側に座つて日向ぼっこをしている時だつてあるし、庭に遊びに来た野良猫を手懐けようと必死だつたり、庭の草抜きをしてしたり、俺の見よう見まねをして、掃除機をかけていたりもする。

なんというのか好奇心旺盛で、俺がやる事全てが珍しいらしく、何かにつけて自分がやりたいと言つようになつた。

まあ家事を手伝つてもらつのは大歓迎なので、好きにやらせてい

る。

食器を洗うのだけ、リツカがやりたいというからさせたおいたのだが、俺の手間が省けた代償に、一週間に何か一つは割つてくれるというオプションつきである。最近はちよつと間隔が開いてきてはいるが。しかし！

とうとう俺は悲鳴をあげた。

「だからもうやめろつて！ このペースだとあと三日もすれば俺ん家から食器が消えてなくなるんだよ！」

呻いて頭を抱えた俺に、リツカは何も言わなかつた。

一分ほどは黙つた後、ようやく口を開いた。

「ぼくはこれをやりたいんだ。今度はもう割らないから。駄目か？」

う、と俺は後退る。

俺を見つめるエメラルドグリーンの瞳が悲しそうに揺れ、柳眉はハの字型。

「…………分かつた、分かつたから。絶対落とすなよ。今度やつたらどうなるか分かつてるな？」

何もかも了承した様子で頷いたリツカだったが、本当に分かつているのかは疑わしかつた。

けれど俺はいちいち確認するのも面倒で、仕事に戻ることにした。薬缶をセットし、ガスのスイッチを捻るのになると、リッカが近寄ってくる。

「お前はまだ火は扱っちゃ駄目だからな。そこで見てる」「分かつてる」

ふうと膨れつ面をしてみせたリッカだが、摘みを捻つて火がつくと、物珍しそうに見つめた。

何がそんなに楽しいのか全く分からん。

「先生、『在宅ですか』」

「おう。つづーか矢倉、いい加減チャイムの存在に気づけや」

「何回も言いますが先生、チャイム壊れています」

「あれ、そうだつたか」

悪い、と口先だけの返事をしておくと、後ろでため息をつかれた。そういうえば前にも同じような会話をしてたつけ。

しばらくペンを走らせて、とうに冷えてしまった珈琲をすすつた。

「だつたらノックぐらいしろよ」

「先生・・・・・これも何度も言いますが、反応遅いです」

「いいじゃねえか。何も言わないよりマシだろ」

私に対しての嫌味ですか、と苦々しく言つた矢倉は、本人いわく無口なのだそうだ。

俺には到底信じられなかつた。

あれだけ口煩い奴が無口だつて。

おかしいつたらありやしない。

そこまで考えると、矢倉はゆつくりと声を張り上げた。

どうやら俺は、今のを口に出していくらし。

「言つておきますが。私は、ちつとも原稿を上げてくださらない作家のために仕方なく喋つているんですよ。そうでなければ用もないのに話しかけたりしません」

「お前友達少ないだろ」

「そ、そんなことありませんよつ」

声が上擦る。図星だな。

「ちゃんといますよ、友達くらい」

「くらいいつてなあ、お前。友達は大切だぞ？ 一次元とかネットとかの友達もいいもんだがやっぱ生身の友達は普通に三次元にもいますよ…」

なまじ肌が白いので、すぐに顔が赤くなる。

怒った矢倉は、それ以降話しかけてもしばらく答えてくれなかつた。

「クラ、ミモにいじめられたのか？」

「おい何人聞きの悪いこと・・・・・・」

「リッカさん・・・・。大丈夫です。苛められてなんかいませんよ。ええ、たとえ締め切りギリギリになつても一向に筆の進む様子がない作家にどれだけ待たされようとも、友人がいないだろうと罵られようとも、私は負けません」

お湯が沸いたのだろう。

新しく淹れた茶を、俺と矢倉の分だけ湯飲みに注いで、お盆で運んできたリッカを認めると、傷心の矢倉は泣き真似をしながらリッカに訴えた。

ていうか、古。

今時筆使つてる奴そうそつ見ないぞ。

いくら書道が好きな人でも日常で使わないだろう。

そこまで考えると恨めしそうに、聞こえてますよそれに筆は言葉の綾ですと釘を刺された。

ヤバイ、また口に出してたのか。

リッカは盆を置くと、よしよしと俯いた矢倉の頭を撫でてやる。

「泣くな、クラ。ぼくも友達だろう?」

「リッカさん」

「クラ!」

ひしひと抱き合つ二人に、俺はげんなりと視線を向けた。

「つたく、矢倉。お前リッカに変なこと教えるなよ。ぱつと見、危ない大人だぞ」

「そうですか？」

そうですかじゃねえよ。成人男子と未成年の男子が抱き合つてゐる時点で更に危ないだろ。

いい忘れていたが、矢倉は編集者の端くれだ。

姓は矢倉、名は光久。

俺は角田社に時たま読みきりの小説やらイラストやらを投稿していて、その担当が矢倉というわけだつた。

外見を説明すると、チャームポイントは眼鏡と田元にある泣き黒子だろうか。

茶味が強い髪に、ほんと茶色に近い色素の薄い瞳。

白い肌に170前後の身長を見れば、覇眞目に見ても頼りない大学生だ。

童顔も相まって、下手すりや高校生にも間違えられるかもしれない。そのせいか、いつも不機嫌そうに眉間に皺を寄せ、口元は引き結ばれている。

詳しく述べば、視力が極端に悪く、対人恐怖症気味なのだそうだ。俺とは普通に話しているじゃないかといえば、貴方は人の警戒心をことごとく打ち破つてくれるんですよと喜んでいいのか分からない返答を返されたことがある。

なぜ編集なんぞやつてるんだと聞けば、本好きも理由の一つではあるが、校閲や編集といった仕事は人とあまり接触しないだろうと思つたから。

甘い。

いくら情報化社会とはいえ、仕事で人とのコミュニケーションは不可欠だ。

そんな矢倉だつたが、根はかなり単純で素直な性格をしているので、編集長にからかわれている場面も多々見受けられる。

家族構成が女性だけのせいか、以前は女性向けのほうの担当だつたらしいが、刺激的な場面は辛すぎたらしく、転属願いを出したとか。

しかし、末っ子の彼は四人いる姉の影響で、仕草や感情表現の仕方が女性らしかつたりする。

つまりはリックに悪影響を『えている根源がこいつだ。

今リックが身に着けているのは、矢倉のお下がりで、白いレースで縁取られているタンポポ色のエプロン。ピンクじやなれば別に男が着てもいいだろうというその基準がよく分からぬ。

男だつてピンクが好きな奴はいる。そんなに珍しくもないだろう。気分が高揚するし、元気が出る暖かな色だし。俺だつて何も色の好みにまで口出しする気はないし、手芸や、編み物や、料理や、可愛い小物が好きな男を気持ち悪いなんて思わないわ。

けれど！

リックは妙に似合つてしまつのだ。洒落にならない。

矢倉にはリックが来た経緯なんかも話してあるので、それならばと自分の子どものころの服を持ってくれたのだが、ほとんどが女物だつた。

何でこんなものばかり持つているんだと聞くと、姉たちのお下がりを着させられていて、家の中だから構わないと普段着に使つていたとか。

英才教育の思わぬ弊害だ。

リックが女装趣味になつたらどうしてくれよ。

ぽつりともらした一言に、友人からは、んなわけねーだろと鼻で笑われたが、いそいそとエプロンをつけるリックを見ると本当に要らぬ心配ばかりが募つていく。

俺がため息をつくと、矢倉は雰囲気を感じ取ったのか、苦笑いをしているのが分かった。

「あ、寝ちゃいましたね」

「寝たか」

振り向くと、リックが矢倉の肩に頭をもたれかけて眠っていた。眠っている時は天使の寝顔。この表現がここまで似合つヤツもうまい。

そういうたら、いつだつたか矢倉に呆れ顔をされたことがある。

親馬鹿だつて？

一体誰の事だ。「イツには本当、手を焼かせられてんだ。

物は壊すし、何事も真正面からぶつかって問題を起こすし、正々堂々としているけど成功したためしがないし、いつも元気な分落ち込みようは半端ないし、俺の言う事なんか聞かないし、いつも冷や冷やさせられてくたくただこつちは。

・・・・・なんだよその、何もかも分かつてますみたいな生温かい目は。

俺は渋々、面倒を見てやつてるだけだ。

そうひ、餓鬼は嫌いなんだからな。

「夜もしつかり眠ってるんだけどなあ

「眠りが浅いんですかね？」

というのも、時折糸が切れたように眠りだすのだ。

確かに周期もない。定期性はあるが、予測が出来ない。しかし、観察によれば沢山動いて、よく考えた後に眠りだす事が多いと思う。ということは、リッカの脳が長時間の活動に耐え切れずに、必要最低限以外、何もかもの活動を停止して休息をとっているのだと考えた方が無難だろう。

眠り姫病、と密かに呼んでいるその症状には、さして害はないので今のところ放っている。

病院にいくかと尋ねたこともあったのだが、本人が行きたがらないのだから仕方ない。

これまでを考えると一時間以上はこのまま眠り続けるだろうから、体が冷えないようにベッドに連れて行くしかないだろう。

「貸して」

「はい」

未だに矢倉に抱きついたままのリッカの体を預かると、横抱きにする。

初めは背中に背負っていたのだが、そうしてくるとベッドに寝かせにくいので、こんな状態になった。

効率的な問題があるとはいえ、この格好は流石に恥ずかしさ感が否めない。

「先生、意外と似合つてますよ」「るせえ・・・・・・」

俺は餓鬼が嫌いなんだ。

はいはい、と何か言いたげな笑みを浮かべた矢倉は、間に冷めてしまったお茶をすすつた。

なんだか納得がいかない。

「ほい、できだぞー」

「お疲れ様です、先輩」

「んー、あとは読みきりの小説の挿絵だつけ。まだ読んでないんだよな・・・・・・」

差し出された茶をすすつた次の瞬間、思つてもみなかつた甘味に噴出していた。

「な、んだこりや！？ 矢倉ー！」

「はい？ どうしました、先生」

どうしましたかじやねえ、何だこの甘い茶は、と言いかけたが、どうも距離がおかしい。

部屋の外から顔を出している矢倉。

じゃあさつき茶を出した矢倉はどこに？

「うつわー・・・・・・お前が、深川」

「はいー。深川都、ただいま参りましたー！」

お疲れじゃないですか、肩でも揉みましょつか？ なんて甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのは、深川都。

俺が振り向いたのとは反対方向で、いたずらっ子のような顔をしているが、これでも成人している。

矢倉よりも背が低いので恐らく170センチには達していないだろ。

猫つ毛を小さく束ねた後頭部の尻尾がチャームポイントだろうか。大きな目に高めの声。しかし、深川はれつきとした男だ。部活の後輩だった男で、大学が終ると時たまここにやってくる。

「いや、別に大丈夫だから」

「そうですかー？ 最近先輩、ますます色白くなってきてません？ 驄目ですよ、外に出なきゃ」

「お前は俺のお袋か」

やだなー、なんて少し頬を染める深川。別に褒めたわけでも何でもない。

「外といえば、また草が生えてきましたねー」

「そうだよなあ・・・・取らなきや、取らなきやって思いながらもやりたくねえつつう・・・」

「じゃ、オレがやりましょか？ 軍手とか鎌とかあります？」

「いやいや。流石に悪いし、今相ツ当、日差し強いから。んなことする前に勉強とか部活しろって」

「いえつ！ そんなことじゃないですよ、先輩の家を美しく保つ事も、オレの立派な仕事です！」

なんだかいろいろ間違っている氣もする。

けれど、草取りをやってくれるという申し出は、ちょっと・・・

・いや、かなり嬉しい。

「・・・・本当に？」

「本当に」

「悪いな、都」

「先輩…………じゃあ、お仕事の合間にこれでも食べてください」

冷やしておきましたから、と差し出されたのはプリンだった。

「おー、お前の手作り?」

「味見はしたので、食べられるとは思つんですが。ちょっと見た目が悪くて」

すんません、と頭を下げた深川ではあつたが、カラメルのかかり具合はそれを十分にカバーしていた。

ふるふるとした動きと輝きが素晴らしい。

「んじや早速、いつただつきまーす…………んあ?」

「都、こいつを甘やかすなど何度も言つてているだろ?」

「アンミシ! お前、よくも俺のプリンを ! スプーン返せ、こらつ、食べるな!」

「甘い…………」

「つたり前だろーが。だからスイーツとか、甘味だとかいつてんだろ。ほらもう返せよ、俺一口も食つてないんだから」

手を伸ばすとアンミシは、分からないと言いながらもう一回、口に運んだ。

奪い返そうとすると、複雑な顔をした深川がもう一つスプーンとプリンの皿を運んできてくれる。

「すまん。手間かけたな」

「いえいえ、先輩のせいじやありませんよ」

「そつか? そーだよな、全ては皿の前の無表情アンミシ男のせいはああ、と深川とため息のタイミングが重なった。

アンミシは恨めしそうに、わざとらしこ、と呟く。

「大体、俺の名前はアマミシだ」

「分かりましたよ、お姫-sama」

「ああ言えよ」
「…………」

よつせじゆ前のため息の方がわざわざこよ、と叫びてやめり。思つたが、まあ、このプリンに免じて許してやめり。

先ほどからアンミツアンミツと呼んでいるこの男は天満白姫。俺の幼馴染で、中学高校と一緒に級生である。アマミツ、をあんみつ。

シリヒメ、を姫。

あだ名を付けやすいこの名前は、彼の祖父が付けた名前らしい。天に一面にある星を表す、天満星という美しい単語が連想できるこの名字にちなんで、彼の家族には星の名前やら、植物の名前やらを贈られる事が多いらしい。

白姫という名前も冬を司る女神のことをいうのだとか。女神なら明らかに女の子に付ける名前じゃねえの、とか思うのだが、男ばかり生まれる天満家に今度こそ女の子が生まれることを願つて、生前から名づけた名がこれ。

今となつては、姫というのがとてもじゃないがキツイお年頃になつてしまつた。

だがしかし、悔しい事に顔の造作は立派だし、足も長い。恐らく紅顔（もしくは厚顔）の美少年時代には、白姫という名前もさぞかし似合つていたことだろう。

つたぐ。

顔はいい、足も長い、背も高い、頭がいい、出来すぎ君かこいつは。

ああでも、性格はそんなにいいほうじゃないか。

天は一物を与えずつて本当だな。

「聞こえますよ、先輩…………」

「え、俺今の口に出してた?」

必死にこくこく頷く深川。

と、矢倉。

「おお、矢倉。

「いたのか」

「いましたよ! さつきかじこに。ずっと無視して…………」

「悪かったよ、でもアンミツが」

「それは後にしてください、先生。挿絵の締め切り、いつか分かつてますよね?」

脅しのようじりじり迫つてくる矢倉の顔は、目が少し血走つていた。

疲れてるな。

「分かつてるつてH、明日だろ? この分なら楽勝楽勝

「今日は」

「だろ、だからだいじょ…………はあ、今日? 明日じゃねえの! ?」

あああやつぱりいい、と頭を抱えながら、矢倉はそれでも自分を取り戻しながら言った。

傍で苦笑いする深川と、アンミツのため息がやけに響く。

「今日は! 私は何回も言いました、聞いてなかつたほうが悪いんです。再度言つておきますが、延びませんからね」

延びませんからね、を一文字ずつ区切られると、ドリフよりしく金だらいが降つてきたよつな気がした。

頭が痛い。

「あ、なんだか頭が痛いな…………」

「延びません」

「……………いたーー」

心も痛い、なんて咳きながら、早速作業に取り掛かる。

挿絵なのだから、一枚で大丈夫だろう。あとはどのシーンを取り出すかだ。

全体を読んで選定までに恐らく一時間もかかるない。うん、今日中に終る、やつぱり大丈夫。流石俺、大丈夫だ俺、頑張れ俺。

呪文のように言い聞かせる。

ナルシストになりたいわけじゃないのだが、こうでもしないと気持ちが挫けそうだつた。

無理やりテンションをあげないと、終りそうにない。他にもちまちまとした仕事があるから、この仕事に一日を使つてしまつとかなりきつくなるつてのに。

遠くで鳥が鳴いた。なんてエ物悲しい鳴き声。

「あ、これも覚えてますか？ 時代のイメージとしては中世ヨーロッパ風。背景を一枚書いてもらつて、それを雑誌のバックに載せますから、それにプラスして本編の一場面を抜き出してください。当然ながら新連載なのでキャラクターの設定表なんかありませんからね」

「…………え？」

え、って。言つたじやないですか、と矢倉は頬を膨らました。どーでもいいけど、んな顔しても可愛くもなんともねえよ。

「だから、作者さんと直に話しあつてもいいですけど、キャラクターのビジュアル、背景設定、全てこちらに任せますから。大丈夫なんですね？」

「大丈夫じゃないー！」

何だそれ、いやキャラクター作りに手を付ける方が珍しかつたりもするかもしぬいけど最近挿絵の仕事なんてほとんどなかつたら作業全工程忘れてたよ。そういう人は確かにいるケドすっかり忘

れていた、つていうか考えたくなかったらどうすりゃいい！

そうだ、こんな時こそまず原稿設定だ、見た目の描写があるはずだ。

「・・・・・オレ、先輩が先月も同じようなこと言つてたような
気がするんスけど」

「奇遇だな、俺もだ」

部屋の奥で再度なされたため息の一重奏は、最早俺の耳に届く事
はなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609ba/>

「下僕賞「当選のお知らせ」（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為

2012年1月5日18時47分発行